

2024年7月31日

7月4日、248回目の米国独立記念日。米国各地で多くの花火が打ち上げられた。赴任して初めて迎える独立記念日であり、ミシガン湖畔に出て、米国民と一緒に花火を楽しんだ。



独立記念日、ミシガン湖畔での花火



プリツカー知事・山田駐米大使と

## 1 4年に1回、夏のビック政治イベント

7月15～18日、ウィスコンシン州ミルウォーキーで開催された共和党全国大会を視察した。夏に2大政党が別々に開催する全国党大会は、両党が候補者を指名する前半戦プロセスのクライマックスだ。同時に、両党の指名候補者が大統領の座をかけて競う後半戦開始のゴングでもある。

共和党は、接戦州ウィスコンシンへのテコ入れとして同州の最大都市（かつ民主党が強い）ミルウォーキーを開催地を選んだ。同市の民主党関係者も、経済的効果と知名度向上の観点から、共和党全国大会の開催を支持したという。

ヴァンス副大統領候補による指名受諾演説もあったが、最大の主役は、暗殺未遂事件以来、初めて公の場に登場したトランプ大統領候補による指名受諾演説。ウィスコンシンに対する感謝に何回か言及していた。シカゴ総領事館が担当している10州の中では、一時副大統領候補と目されていたバーガム・ノースダコタ知事と、ノーム・サウスダコタ知事による演説も行われた。

エンターテイメント的要素も多く、会場内外はお祭りムード一色。ウィスコンシン州の代議員は皆で地元のアメリカンフットボールチームであるグリーンベイ・パッカーズの応援の際にかぶるチーズ型の帽子をかぶっている。公約と

して政策綱領（platform）も作成され、11月の本選挙に向けて党内を一致団結させ、一丸となった雰囲気を出す決起集会だ。

8月19～22日にはシカゴで民主党全国大会が控えている。8月7日までに、ハリス副大統領が大統領候補となり、副大統領候補を指名した上で、指名受諾演説に臨む見通しだ。日米同盟は日本の外交安全保障の基軸であり、大統領選挙を巡る動向は引き続き注視し、しっかりフォローしていきたい。



共和党全国大会の会場前で



会場内はお祭りムード

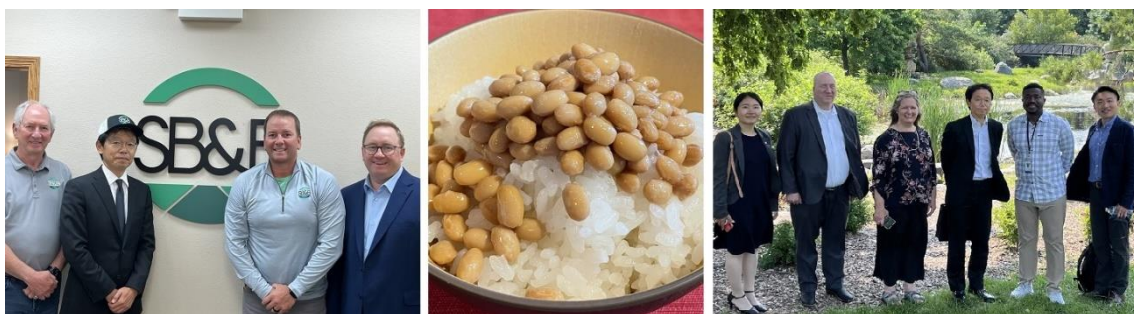
## 2 「平和の庭の州」 ～ ノース・ダコタ

7月8～10日、担当中西部10州の中で、唯一訪問していないノース・ダコタを訪れた。ドイツ統一を成し遂げたビルマルク首相の名前に因んだ州都名。1800年代後半からドイツ系移民が多く集まった。過酷な寒暖差のためか、人口は約80万人。それ故に、我慢強い人が多いという。

SB&B 食品の本社（創業家の御自宅か）と工場・倉庫を訪れた。1906年にドイツから移住したシナー家が始めた農業は現在5代目。4代目のロバートさんが1989年頃から日本に輸出し始めた大豆（非遺伝子組み換え）や春小麦は、九州生協の豆腐や、全国各地の納豆やパンに使用され、「顔の見える」生産者・輸出業者「ボブさん」として日本でも知られている。ボブさんの大豆を使って自宅で納豆を作ってみたが、いい艶を出している。日米間に存在する30年以上に及ぶビジネス・パートナーシップの一つだ。3代目の故ジョージ・シナー氏は元州知事で、現在のところ民主党最後の知事とのこと。

栃木県鹿沼市と友好都市関係にあるグランドフォークス市には、日本から寄贈された日本庭園がある。同公園にて日本生活経験のある1人の米国人女性と

懇談した。同人は、学生を引率して鹿沼市を訪問している他、昨年 JOI（国際交流基金から地方での草の根交流を行うために派遣されている若手日本人）と一緒に日本祭りを始めたという。今年も、国際交流基金からの助成金を受けて太鼓を招いた他は、ほぼ手造りで開催するという。総領事館や在ミネソタ州名誉領事からのアクセスも簡単ではない地で、自発的に草の根交流が活発化していることに勇気付けられた。



ボブさんと      ボブさんの大豆から作った納豆      日本庭園で関係者と

### 3 様々な方々による日本関連の発信

7月20日、日系人トヨダ氏が主宰する「日本文化センター」がレイクビュー一地区で開催している IKEBANA WALK に参加。地区の目抜き通りの両側のショップ内に、池坊と小原流の生花、さらに習字と折り紙を設え、皆で鑑賞して歩くイベントだ。トヨダ氏が日本文化センターの幟を持ち先頭を歩くのだが、時間とともに、段々と参加者が増えてゆく。2021年、コロナ禍でも市民に日本文化に触れてもらいつつ、地元の経済活動を支援するために始めたという。レイクビューは多くの日系人が生活してきた地区。この年間行事が、その歴史的紐帯を伝承していくと同時に、日本の伝統的アートと地元コミュニティとの共存共栄を象徴していくことだろう。

7月25日、ホロコースト博物館と米国ユダヤ人協会シカゴ支部が共催で開催した杉原千畝に関するパネルディスカッションにて開会挨拶の機会を頂いた。金融先物市場の生みの親としても著名なレオ・メラメド氏による第二次世界大戦中ナチスの迫害を逃れてポーランドを離れ、リトアニアで杉原千畝副領事から「命のビザ」の発給を受けた後、てシベリア横断を経て日本・敦賀へたどり着いた体験談に聴衆が聞き入っていた。日本からも「人道の港 敦賀ムゼウム」の西川館長も参加。杉原千畝の発給したビザが数世代にわたり何万人もの命を

救うことになった、個人の行動が状況を変えることができるとのストーリーが人々の心を打つ。多くのユダヤ系米国人が日本人に親しみと感謝の念を持って接してくれるのは、杉原千畝の存在が大きいと実感する。

7月28日、アンダーソン日本庭園の日本夏まつりにて、郡司紀美子イリノイ大学名誉教授の御茶席に招かれた。ロックフォードのアンダーソン日本庭園とイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の日本館のように、各地の日本文化の発信拠点が、点として存在するだけではなく、お互いに繋がっていることを心強く思う。

7月31日、当地にて着後研修中の「日米草の根コーディネーター（JOI）」日本人8名との意見交換会を行った。JOIは、国際交流基金と米国の非営利団体が共同実施しているプログラム。米国の各地方に2年間派遣され、日本への関心と理解を深めるため、地域に根ざした交流を担っている。日米同盟とグローバル・パートナーシップの基礎には、草の根レベルでも長年にわたり培われてきた信頼と友好の絆がある。各州への出張の際にお会いする機会があるが、皆さん、本当に溶け込んで、大いに活躍・貢献されている。



生け花ウォーク



杉原千畝関連パネルディスカッション



日本庭園での茶席



JOIの皆さんと